

番長と捻くれぼっち

judolover

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鳴上悠が八十神高校に転校し4ヶ月が過ぎようとしたある日、ひねくれ者ボッチこと比企谷八幡が転校して来た。人気者の鳴上悠とボッチ比企谷八幡が出会ったその日から運命が変わっていく…

目次

プロローグ	1
第一話始業式	6
第二話 9月4日	16
第三話 修学旅行初日	24
第四話修学旅行二日目昼	30
第五話修学旅行二日目夜	35
第六話修学旅行最終日	40
第七話9月11日	44
第八話9月12、13、14	50
第九話9月15日	57

プロローグ

夏休みの終わりが近くなつたのある日、
里中千枝が慌ただしく駆け寄つてきた。

そして息をあげながら、

千枝「鳴上君！聞いた！聞いた!？」

鳴上「里中、どうした？」

俺が質問すると横から茶々を入れるように、

花村「なんだ、また肉の話かー？」

花村「女子として慎みをもて慎みを」

と花村陽介がおどけながら言うと

千枝「違うわ!! 慎みぐらいもつてるし！」

千枝「てか昨日はビフテキ申しか食べてないし！」

するとやや呆れながら、

雪子「でも、食べたんだ……」

天城雪子がつぶやく。

千枝「別にいいじゃん、旨いし！」

千枝「じゃなくて、ニユースがあるんだって！」

りせ「ニユース？」

久慈川りせが首をかしげると、

完二「そんなすごいニユースなんすか？」

と巽完二が期待せずにあざねる。

千枝「そうそう、なんと二学期から……」

花村「二学期から？」

ゴクリと皆が唾をのむ。

千枝「千葉から転校生がくるらしいのだぞよ！」

全員「転校生!？」

完二「この時期に珍しいっねー」

雪子「何年生かはわかるの？千枝？」

千枝「何年生かはわかんないけど柏木が舌なめずりしてたから多分、いや間違いない

男だね」

花村「なんだよ、男かよ……」

鳴上「陽介泣くな。」

完二「花村先輩、どんだけ期待してたんすか…」

??「ナニナニクマが働いてる間に何楽しい話してたクマか？」

暗いムードを壊すようにして来たのはクマだった。

鳴上「そつとしておこう。」

りせ「それがいちばんかもね。さっすが先輩！」

雪子「じゃあ行こうか。」

花村を置いてフードコートから去っていく。

花村「待って！置いて行かないで。」

鳴上「そつとしておかなくて良かったのか？」

花村「おくなよ！寂しいだろ!!」

そしてはははと、笑い声が響くのであった。

.....

一方その頃駅では、

ここでしばらく過ごすのか、

空気も美味しいし悪くはねえな

てか喉渴いたしマツカン飲んでえな

って、マツカンねえじゃん！

小町もいなくてマツカンもないんじやどうしようもないな、てかまじでどうしよう！
あの甘さが味わえないと思うと辛すぎる…

不幸だー

あ、やつべどつかのレベル0みたいなこと言っちゃった

そげぶしないとそげぶ

てか平塚先生もひどいよな

稲羽市に半年行ってこいなんて

雪ノ下も由比ヶ浜もなぜか勧めてくるし

俺そんなに嫌われてたっけ

やだ八幡泣いちゃう

こんなことを考えながら

駅を後にし借りたアパートへと歩みを進める。

来たものはないしやるしかないよな

自分と向き合う強さを探しに

こうして比企谷八幡は八十神高校へ通うことになるのであった。

第一話始業式

始業式の日がやってきた。

宿題も終わらせたので気持ちよく登校できそうだ。

そんなことを考えていると、

菜々子「おにーちゃん！あさごはんできたよー！」

と堂島菜々子の元気な声が聞こえたので、

鳴上「わかったー、すぐいくよ。」

と台所へと向かった。

堂島「おう、悠、おはよう。」

鳴上「おはようございます。堂島さん。」

叔父の堂島遼太郎と挨拶を交わし席に座る。

菜々子「きょうのあさごはんは菜々子がつくったんだよ。パンとめだまやきとたまご

やき！」

鳴上「美味しいよ。ありがとう、菜々子。」

堂島「菜々子、大したもんだな、美味しいぞ。」

しかし、菜々子は少し申し訳なきように、

菜々子「でもちよつと焦げちやつた……」

鳴上堂島「いや、焦げてるところがおいしいんだ」

二人で菜々子にハモリながらフオローを入れる。

菜々子「焦げてるところはからだによくないから、だめなんだよ！」

鳴上「ごめん……」

堂島「すまん……」

逆に怒られてしまった……

三人「……」ごちそうさまでした」

そうして朝ご飯を食べ終え学校へと向かう。

外を見ると雨が降っているようだった。

そういえば今日から転校生が来るんだったか……

……

一方その頃、

稲羽市商店街を比企谷八幡は歩いていた。

相変わらずの猫背で見慣れない学生が歩いているのだから、自然と町の人も目がいく

ようだった。

しかし注目されるのをよしとしないのが比企谷八幡という男であった。
やべーめつちや見られてる

ステルスヒツキー役立たねー

田舎町だと人少なくて嫌でも注目されるのか

でも珍しいものを見る目だけだから良かったな

蔑むような目で見るようなやつはいないらしい

どうやら、いや確信したが八十稲羽市はいいところみたいだな

?? 「やあ、おはよう。」

八幡 「は？」

店員 「僕はガソリンスタンドの店員だよ。君があまり見ない顔だったかつい声をかけ
ちやつたんだ。」

八幡 「はあ」

なんか話かけられちやつたよ！

髪が長い色白のおにいさんだよ！

なにそんなにステルスヒツキー利かないの？

さすがに話しかけられはしないと結構だったのに！

八幡困っちゃう

店員「君名前は？」

八幡「比企谷八幡です。」

店員「比企谷君か、うちバイト募集してるんだ。もし興味があったら来てみてよ。」
すると店員は手を差し出した。

握手を求めているらしい。

八幡「機会があればお願いします。」

ぺこりと礼をしてその場を去った。

店員「握手してくれないの？」

八幡「すいません、急いでのので。」

あ、やべほんとに時間きついかも

急いだが良きそうだな

たったたと走って俺はその場から去った。

後ろから、握手してくれないんだ…へえ…

と聞こえたが気にしない気にしない

しかし、少し違和感が…

.....

始業式が終わりホームルームの時間になった。

始まると担任の柏木先生が、

柏木「みんなく今日からなんと転校生がこのクラスにやってきまゝす。」

ザワザワザワザワ

クラスメイト「え、どんな人だろ？」

クラスメイト「イケメンがいいな」

クラスメイト「先生！ちなみに男ですか、女ですか？」

柏木「男の子よーん」

クラスメイト「やったー!!」

クラスメイト「なんだよ、男かよ」

ザワザワザワザワ

千枝「ね！ね！転校生来たでしよ！」

鳴上「そうみたいだな」

花村「まじで男かよー、なんかがっかり…」

雪子「花村君、転校生に失礼だよ」

花村「だつてよ」

柏木「はい、静かに。じゃあ転校生くん入つてきていいわよ」

ガラガラ

八幡「うす」

柏木「自己紹介お願いね」

八幡「千葉の総武高校から来ました。比企谷八幡です」

柏木「じゃあ比企谷くんの席はあの席、鳴上千んの後ろでいいかしら？」

八幡「わかりました。」

鳴上「比企谷か、よろしく」

花村「比企谷、俺は花村陽介よろしくな！」

千枝「あたしは里中千枝！よろしくね！」

八幡「……うす」

柏木「じゃあホームルーム進めるわよ」

この時の陽介、千枝、雪子の八幡への印象は

三人「「変わった人だな……」」

しかし鳴上悠だけは、

鳴上「面白そうな人だな」

と意外なまでの好印象だった。

……

放課後になり、自己紹介という重労働を終えた俺は自宅へと帰ろうとしていた。

しかし、

花村「ちよつと待てよ比企谷く一緒に帰ろうぜ！」

千枝「そうだよ、帰ろうよ。ね！雪子く」

雪子「自己紹介がまだだったね。私天城雪子、よろしくね。」

八幡「どうも」

雪子「千枝達の言うとおりせつかくだし一緒帰らない？」

八幡「はあ、わかったよ」

やばいやばいクラスのなかでも個性の強い、しかもトップカーस्टの連中に捕まってしまった！

しかも帰る約束しちやったし！

鳴上「じゃあ、行こうか」

八幡「…おう」

鳴上：悠だったかなんかこいつは周りの花村？とか里中？とかとは違う気がする…

なんでかはわからないが安心感があるな…

ん？

雪子「比企谷君どうしたの？」

八幡「いや、こつちに向かってくるやつがいてな」

するとそこには小柄な少年がいた。

なんか背格好は戸塚っぽいな

ああ戸塚に会いたい：

?? 「こんにちは。また会いましたね」

鳴上 「君は事件を調べている…」

直斗 「白鐘直斗です。これからよろしくお願いしますね。先輩。」

鳴上 「ああ、よろしく頼む」

言い終わり礼をすると、白鐘直斗と名乗る少年は去っていった。

そしてその小さな背中ではなく大きなものを抱え込んでいるように見えた。

その背中をしばらく見つめてみると、

八幡 「……」

花村 「？比企谷どうしたよ？」

八幡 「ああ」

完二 「先輩！今帰りつすか？」

りせ 「私達もいつしよに帰ってもいい？」

後ろから声が聞こえたので振り返るとそこにはヤンキー風の男とテレビで見たこと

のある女の子がいた。

つてりせちーじゃね!?

小町がかわいいよね〜と言っていたので覚えている。

男のほうも前にテレビで見たことあるぞ。

あの暴走族を潰したって言う異完二か!?

トップカーस्टはこんなすげー奴らとつるむのか…

住む世界が違う気がする…

完二「あれ?この人が噂の転校生つすか?」

りせ「あ、ほんとだー」

八幡「比企谷八幡だ。」

完二「俺は異完二、一年生つす」

りせ「私は久慈川りせ!よろしくね比企谷先輩!」

八幡「ああよろしく」

千枝「自己紹介も済んだみたいだしいいこうよ!」

そうしていきなり個性の強いメンバーでの下校が実現し、他愛もない話をするのであった。

.....

自宅に着いての俺の第一声は、

八幡「疲れたー」

であった。それほど彼らとの下校は疲れたのだった。
しかし、ここまで好意的だと悪い気分ではなかった。

明日も、頑張つて学校いくかな…

らしくないことを考えながらベッドに横になり、まぶたを閉じる俺だった。

第二話 9月4日

修学旅行前の最後の週末だ。

今日は修学旅行で使うものを買うのがいいだろう。

誰を誘おうか……

陽介、里中、天城は誘うとして……

そうさせつかくだし比企谷も誘おう。

電話に出るだろうか……

……

はあー、よく寝た……

そういえばこつちに来て初めての週末だな。

リア充達はこぞつて沖奈市とかに原付でいくのだろうが、俺は休日は休むと決めてい
るので出かけない。

そして8時半から始まるプリキュアをみるのだ。

プリキュアバカにする奴らいるけど、プリキュアおもしろいよね。笑えるし泣けるし

……

プルルル、プルルル、

誰だよこんな朝から電話なんて…

鳴上か、平塚先生なら無視するところだが、そうもいかないな。

八幡「はい、比企谷ですが」

鳴上「あ、比企谷か？朝から悪いな」

八幡「別に構わないぞ」

鳴上「それは良かった。来週から修学旅行が始まるよな？だからいまか…」

八幡「断る」

鳴上「え、なんで？」

八幡「ほら、俺今日はアレしてコレしないといけないから忙しいんだ」

鳴上「具体的になにするんだ？」

八幡「…」

鳴上「…」

八幡「はあ、わかったよ」

鳴上「良かった。場所は沖奈市のそうだな…シャガールって店わかるか？」

八幡「名前しか知らんがGoogleで調べれば行けるだろ」

鳴上「そうだな。場所はそこで時間は10時集合でどうだ？」

八幡「わかった。じゃあまた後でな」

鳴上「ああ」

ピッ

…まじかよ。プリキュア見れねえじゃん。

録画しよ。

休日まで外出たくないけどしょうがないか。

はあ…

.....

一足早く沖奈市のシャガール前に着いた俺は陽介と里中、天城、そして比企谷を待っていた。

花村「しかし、悠。よく比企谷連れ出せたなくあいつあんま外に出たくなさそうだからよ」

鳴上「確かに始めは拒否されたが。」

花村「やっぱされたのね!？」

鳴上「だが最後は来てくれることになった」

花村「悠。お前すげーよ。拒否されても誘い続けるってマジすげーよ…俺なら絶対無理だ。泣いちゃう」

鳴上「比企谷はごり押しすれば行けると思っている！」

花村「なんだよその自信……」

千枝「おーっす！」

雪子「ごめん待たせちゃった？」

鳴上「いや全然待ってないから大丈夫だ」

千枝「よかったー、って比企谷君は？」

言われから周りを見渡す。

比企谷らしい人影は……いた。

あの猫背、何よりあの死んだ目は比企谷だ。

八幡「うす」

花村「比企谷く遅くねってあれ10時ぴったりだ」

八幡「待ち合わせは時間通りと決めている。早く来て待ち続けたり遅く来て置いてくれたりしないようにな」

千枝「理由が何か悲しい……」

雪子「早く行こうよ。まずは何買うの？」

鳴上「ああ、まずは……」

こうして俺達5人で過ぐす初めての週末はスタートしたのであった。

.....

買い物が終わりに昼の3時をまわった頃、

千枝「いや、結構買っちゃった」

雪子「そうだね」

花村「何か後半お前ら関係ないもん買ってなかつたか？服とか修学旅行中は制服なんだからいらないだろ？」

千枝「やっぱりあたしだって慎みのある女の子だしね」

雪子「千枝、あれ引きずってたんだ……」

八幡「花村、女子は買うのが目的なんじゃない。選んでキャツキャツキャツするのが目的なんだ。だからしようがないんだ。あきらめろ」

花村「まじかよ……」

千枝「比企谷君わかってるね」

八幡「妹の小町が言っていたからな」

鳴上「そうなのか」

なぜか比企谷の言葉には思わず納得してしまうな。

妙な説得力があるというか、重みがあるというか……

俺と同じように花村も納得しているみたいだ。

八幡「あとは用はないな」

雪子「そうだね。これからどうする？」

八幡「帰るか go home するか 2 択だな」

雪子「ぷっ、比企谷君どっちも一緒だよ…ふふふ」

千枝「あ、もしかしてこれは」

雪子「あははははははははは!!」

八幡「なんだこれ…」

鳴上「天城の大爆笑だな」

これが始まったらしばらくおさまらないな…

そつとしておこうか…

千枝「あーしょうがない。今日は解散にしようか」

花村「そうだな。天城もスイッチ入ったみたいだし」

八幡「ああ、そうだな」

鳴上「じゃあまた明日」

みんなと別れた俺は一人鮫川河川敷を歩いていた。

今日は楽しかったな。

比企谷も徐々になじんできているみたいだし良かった。

比企谷はやっぱり面白い奴だった。

いつものメンバーとはまた違うタイプで一緒にいて楽しい。

この5人での修学旅行がとても楽しみだ。

.....

沖奈市から帰って来て商店街を歩いている俺は不思議と気分が良かった。

いつもなら休日は出かけたたくないから出かけると疲れで目が三割増しに腐るのだが、今回はそれが無い。

やっぱりあいつらといたからだろうか。

するとだいだらばつち前で一人の少年が聞きこみをしていた。

確か…白鐘直斗だったか。

何気なく見ているとこちらに気づいたらしく、俺に向かって歩いて来た。

直斗「何か用ですか？」

八幡「いやこないだ鳴上と話していたと思って気になっていただけだ。特に用はない。」

直斗「そうですか」

八幡「…お前はなにをしていたんだ？」

直斗「質問するなら自己紹介するのが筋ではないですか？」

八幡「比企谷八幡だ。」

直斗「僕は白鐘直斗です。これからよろしく御願いますね。比企谷先輩」

八幡「ああ、よろしく」

直斗「何をしてたかですが…くわしくは言えません。」

八幡「そうか、無理して聞くほどじゃないから別にいいけどな」

直斗「そうですか。では急いでいるので失礼します」

八幡「おう、邪魔して悪かったな」

一礼をすると白鐘直斗は聞きこみを再開した。

あの様子から見るに何か事件を追っているようだが、

何か焦っているように見える。

…少し気にしていた方がいいかもな…

少しの不安を残し、俺は商店街を後にした。

第三話 修学旅行初日

今日から二泊三日の修学旅行だ。

行き先は辰巳ポートアイランドだ。

比企谷も含めた班になりとても楽しみだ。

.....

とうとう月光館学園に来た。

……だが校長先生の話がやたら長い。

みんなも退屈しているようだ……

校長「えーあーうーこの学園はですね……」

花村「この校長やたら話長いな……」

千枝「ホントだよね……」

八幡「どこの校長もこんなもんだろ……」

雪子「みんな、聞こえるよ」

校長「ということ、ここからは会長、お願いします。」

伏見「はい。会長の伏見千尋です。それでは説明します。……」

ようやく校長の話も終わり伏見千尋という会長に代わった。とても利発そうで綺麗な女性だ。

花村「やつべーめっちゃレベル高い」

完二「そ、そうっすね」

鳴上「確かに」

八幡「盛り上がり過ぎだろ」

千枝「そうだよ、話聞かなくちゃ」

伏見「あ、どうしよう」

伏見会長が話が終わり解散するところらのほうへ歩いて来た。

伏見「あの…すいません。このプリントみなさんに渡していただけないでしょうか。渡し忘れてしまってます…」

八幡「わかりました」

鳴上「いいスピーチでしたね」

伏見「ありがとうございます！このスピーチ一昨年の会長と一緒に考えたものなのでそう言っていただけるととても嬉しいです。それと、この後は特別授業があるので移動をお願いしますね」

花村「わかりました。ありがとうございます」

伏見「では失礼します」

伏見会長は去っていった。

これから特別授業があるようだ。

しかしみんなは、不満そうだ。

花村「今特別授業って言った？ 授業って言ったよね!？」

八幡「何でここまで来て勉強しないといけないんだ」

千枝「せっかくの修学旅行なのにね」

雪子「でもしようがないし修学しよ。ね！」

仕方ないので特別授業に向かおうか……

……

授業と聞いて腐った目をより腐らせながら特別授業に参加した。

俺ははじめはあまり興味はなかったが、江戸川先生のイザナギ、イザナミについての話を聞いたが、なかなか興味深かった。

いや俺嫌いな理系科目だからね。

これでも総武高校では国語学年三位の成績だからね。

超文系だから。

そんなことを考えていると、なにやら怪しい雰囲気を通りに来ていた。

あるホテルの前で止まると、

柏木「はいいここです。シーサイドシティホテルはまぐり。ここに泊まるわよー」
いやいやいやここ完全に潰れたラブ…

……言わないでおこう。

りせ「ここはね、白川通りっていつて…」

八幡「久慈川！それ以上は言うな」

花村「比企谷、いい判断だ」

鳴上「ナイスだ！比企谷」

千枝「なにそっちで盛り上がってるの」

雪子「なんか知らないほうがいい気がするよ。千枝」

??「フツフツフツやっつと見つけたクマよ。ヨースケはどんな顔するクマね…」

なんか不気味な声がある。

うえか!?

??「トウ！ぐえ!?!」

ドーン!!!

なんだこの不思議な着ぐるみ…

不信者かな？不信者だね！

俺に不信者と思われるなんてこいつ相当だな…

いやさつきヨースケと言ったな。

てことはこいつらの知り合いかなんかか？

八幡「あんた誰だ？」

クマ「クマはクマクマ！そつちこそダレクマか？」

八幡「比企谷八幡だ。最近引つ越してきた。」

クマ「じゃあヒツキークマね！」

八幡「…ヒツキーか。懐かしいなそのあだ名…」

そういえば、雪ノ下と由比ヶ浜は元氣だろうか…

あとマイエンジェル戸塚と小町!!

…気にしないようにしよう。

鳴上「比企谷大丈夫か？」

八幡「ああ、大丈夫だ…」

クマ「ヒツキー、クマもうハトハトよー早くホテルに入るクマ！」

八幡「そうだな」

花村「いやダメだろ！比企谷投げ出すなー！」

柏木「なあーにどうしたの？」

千枝「あつやば」

柏木「んー？わあ大きなクマちゃんね。早くなかへ持つて行きなさい」

柏木先生はホテルへ戻っていった。

なぜだろう？ここへきてどつと疲れが…

クマかクマのせいなのか!?

花村「はあ、早くなか入ろうぜ」

完二「そうっすね」

りせ「あー疲れた」

続々とホテルのなかへ入っていく。

俺も入ろう。そしてはやく寝よ。

クマ「…：…漏れる」

鳴八「!?!」

その前にクマをなんとかしないとだつた…

第四話修学旅行二日目昼

修学旅行二日目になった。

午前中はいつものメンバーにクマを加えてポートアイランドでウインドウショッピングをした。

しかし俺は午後は鳴上達とは離れ久しぶりにぼっちらしく一人で行動する事にした。

花村や完二は一緒に行こうとしつこかったが鳴上が俺の気持ちを尊重してくれた。

こいつらといるのは楽しいのだがまだ慣れていないせいか疲れてしまう。

だから、ぼっちにはこうした一人の時間が必要なのである。

別に、シヨッピングで荷物持ちさせられたり、服の意見を求められて困ったりしたわけじゃないんだからね。

丁度昼時から少し立ち、飲食店から人が出て行く時間だったので遅めの昼食を取ることにした。

葉隠か…あまり聞かないラーメン屋だが折角なので入ってみることにした。

店主「いらっしやい！」

店内は和の雰囲気に含まれ俺としてはなかなか好ましく感じられた。

右にカウンター席、左にテーブル席があるがぼっちは当然カウンター席を選ぶ。

店主「何にしましょうか。」

元気に店主が聞いてくるので、メニューを一瞥しすぐに注文する。

八幡「じゃあ、コラーゲンしょうゆラーメンで。」

店主「はいよ、コラーゲンしょうゆ一丁!」

コラーゲンしょうゆラーメン、名前だけで肌がツヤツヤになり魅力でもあがりそうなラーメンだ。

店主「いらっしやい!」

店主が声を大きくあげたので、その方向を見ると少年探偵で有名な眼鏡の小学生の方でない、探偵王子こと白鐘直斗がいた。

直斗「比企谷先輩ですよね。こんにちは。」

八幡「おう。」

白鐘が礼儀正しく挨拶をするので俺も返事をする。

白鐘が俺の隣の席に座り、

直斗「コラーゲンしょうゆラーメン一つお願いします。」

俺と同じメニューを注文する。

それより何でナチュラルに隣に座ってるの? そんなに俺ら仲良かったっけ? そんな

ことないよね。

直斗「先輩は、どうして一人でここに？鳴神先輩達とは一緒ではないのですか？」

八幡「ぼっちは定期的に一人でいないともたないんだよ。ここにはベストプレイスもないしな。」

直斗「ベストプレイスとは何ですか？」

八幡「前の学校にあつた場所で、あそこは一人でいれるだけでなく、潮風が変わる瞬間まで楽しめる最高の場所だ。しかし、雨の日は濡れるから行けなくなるんだけどな。」

直斗「そうなんですか。良さそうな場所ですね。」

そう言つて微笑む白鐘はとても可愛らしく感じられた。

いや、白鐘は男だから。

性別上だけだから。

全く戸塚といい最近は男の娘はそんなに多いのか。

大歓迎ですね。

直斗「先輩、どうされました？」

八幡「ああ、気にするな。何でもない。」

店主「コラーゲンしようゆお待ち！」

白鐘が訝しげな顔をするが、それを遮るようにラーメンが二つ俺たちの前に出され

た。

正直助かった。

八幡「そういえば白鐘はどうしてこの町にいるんだ？」

直斗「僕は事件を追っているんです。先輩は知りませんでしたね。ここでは連続殺人が起こっていて既に数人が犠牲になっています。僕はその事件を探偵として解決したいんです。」

そう言う白鐘の目は強い決意とほんの少しの寂しさが感じられた。

八幡「なあ白鐘。」

直斗「何でしょう？」

八幡「俺は前の学校で奉仕部って言う部活をしてたんだ。だから俺に手伝えることがあれば言ってくれ。」

直斗「お気持ちだけいただいております。これは危険な事件です。僕や警察に任せて下さい。」

八幡「……そうか。無理はするなよ。」

直斗「ありがとうございます。」

我ながら柄にでもないことを言ったなと思っている。

しかし言わずにはいられなかった。

これも俺の黒歴史の一ページになるのだろう。

直斗「でも先輩、僕嬉しかったです。」

八幡「お、おう。」

直斗「失礼します。」

白鐘は少し照れたような表情を浮かべて早々に会計を済ませ葉隠を後にした。

かわいかったな…。

じゃなくって、俺も早く食わないと。麺が伸びてしまう。

比企谷八幡の魅力が上がった。

少し魅力が上がった気がするが俺には関係ないだろう。

そんなことを考えながら葉隠を俺も後にする。

そしてあのいかがわしい雰囲気のホテルに一人帰った。

鳴神達と合流し話を聞くと今晚は、久慈川の案内で出かけるらしい。

変なことにならないといいけどな。

第五話 修学旅行二日目夜

比企谷と合流した俺たちはりせに連れられてクラブのVIPルームに来ていた。

花村「すっげー。俺こんなとこ初めて入ったわ。」

完二「そうっすね。なんか変な感じっす。」

りせ以外は皆驚いているようだ。

八幡「で、何で白鐘もいるんだ？」

直斗「久慈川さんと天城先輩に捕まっただんですよ。」

八幡「なるほどな。」

りせたちに強引に連れられた白鐘と共にパーティー？は始まり、それぞれが一杯目の飲み物を飲む。

りせの話によると今日は無料だそうだ。

お金のことは気にせず思い切り楽しもう。

と思っていたが、どうやらドリンクにアルコールが混ざっていたらしくクマ、りせ、天城の顔が赤く完全に酔ってしまっているようだった。

りせ「王様ゲーム！」

そのりせの一言で王様ゲームが行われることとなった。

一回目で完二とクマがリタイアしてしまい、残ったメンバーで続きをする事になった。

りせ「王様だーれだ！」

王様は…

鳴上「俺だ。」

花村「悠なら安心だな、変なことは言わなさそうだぜ…。とりあえず一安心。」

千枝「そうだねー、流石にキスはきつかったからね。鳴上君、健全なやつお願い！」

周りからの期待の視線が熱い…

そのせいか、不思議と顔と体も熱いような…

………

これはまずいぞ。

どうやら鳴上まで酔ってしまったらしい。

さつきは酔ったクマのせいで完二が大変なことになってしまったし、このままではこ

こは無法地帯になってしまう。

俺は、五番…か。

鳴上「王の名において命ずる。六番は五番を抱きしめろ。異議は認めん。」

八幡「……は？」

鳴神「キヤラ崩壊つてレベルじゃねえぞ。

で、六番は誰だ？

ぼっちの思考力をなめるなよ。

周りを見渡すと里中と花村は安堵の表情だ。

まず違うだろう。

天城、久慈川は真つ先に騒ぎそうなのに騒いでいないのは、仮に六番だったらおかしい。

だとすると…

直斗「……五番の人、お願いします…」

やはり白鐘か、何なのこのトラブった展開、こんな間違ったラブコメ展開求めてないって。

八幡「すまん。俺だ。」

花村「比企谷、白鐘、なんかゴメンな…」

千枝「いつもはこんな感じじゃないんだけど。」

天城「なおとくんもはやくだきつけー！」

りせ「ひきがやせーんぱい、おとこならうけとめてあげないとだーめーよー。」

鳴上「……。」

天城とりせが酔っぱらい特有のうざさを発揮し、鳴上はいつの間にかシャツまで開け、俺たちに無言のプレッシャーをかけていた。

直斗「先輩、お願いします。」

八幡「任せろ。」

白鐘が顔を赤らめ恥ずかしそうにする姿が可愛い過ぎて思わず、即答してしまった。きつと俺も酔いが回っていたんだ、うん間違いない。

……黒歴史確定かもしれない。

直斗「っ。」

八幡「!!」

花村「や、やりやがった。」

千枝「直斗君意外と大胆……。」

白鐘が俺を優しく抱きしめた。

近い近い近い近い匂い、いやいやだめだ、白鐘は男、男だから!

直斗「こ、これでいいですか。」

鳴神「……。」

鳴上はゆつくりとサムズアップをする。

どうやら王様のオーケーだったようだ。

無事にはないが何とか二回戦も終わりその後四苦八苦しながらそれなりに楽しい時間が過ぎていった。

終わる間に白鐘が彼自身の過去を告白した。

話を聞く限り白鐘は白鐘自身を認めて欲しいと思っっているようだった。

しかし、それだけではないような気もする。

その後酔った天城と久慈川がペルソナー！とかテレビの中がどうか言っていたが流石に冗談だろう。

冗談だよね？

いろいろな気になることが残りながらも俺達はクラブを後にした。

あと素面組でドリンクを調べたらノンアルコールだった。

全員場酔いとか本当に笑えねえ。

それだけ俺達がああいうところに不慣れた健全な高校生であったということにしよう。

まあ健全な高校生はそもそもクラブになんていかないか…。

第六話修学旅行最終日

俺達は最終日の昼に葉隠を訪れていた。

花村「しっかしここのラーメンうまいな。」

千枝「本当だよねー。愛屋の肉丼もうまいけどここのラーメンもいけるいけるー。」

鳴上「里中がそう言うなんて相当だな。」

花村「ホントホント。肉に命かけてるもんな。」

千枝「そんなこと！…あるかもだけど…。」

八幡「あるのかよ。」

天城「肉命って！アハハハハハハ！」

完二「天城先輩の大爆笑つすね…。」

クマ「雪ちゃんとは変わらずクマねー。ラーメン伸びちやうクマよ。」

クマはそう言うと同時に天城のラーメンに手を伸ばし、凄まじい勢いで食べ始めた。

天城「あ！私のラーメン！まだ食べてたのに。」

花村「クマ吉！お前どんだけ食ってんだよ！」

鳴上「1、2…10杯か。ハイカラですね。」

八幡「ハイカラじゃねえよ。あと天城の分いれると1杯だぞ。クマお前金あんのか。」

クマはチラリと陽介の方を見る。

その目は陽介に支払いを訴えかけていた。

花村「アホか！お前は！」

天城「私のラーメン……」

千枝「雪子。しようがないよ。」

直斗「そろそろ集合の時間ですね。」

八幡「もうそんな時間か。」

りせ「なんだかんだ楽しかったよね。」

千枝「そう言えばお土産はどうするの？」

鳴上「俺はそうだな……。ちようちんにしようかな。」

八幡「土産か。」

直斗「比企谷先輩は何か買うんですか？」

八幡「ああ、妹にな饅頭でも買おうかと思っっている。」

直斗「妹さんがいるんですね。」

八幡「ああ、かわいいぞ。いくら白鐘でも小町はやれんな。」

鳴上「比企谷、気持ちわかる。俺も菜々子をそう簡単にはやらん。」

そして俺達は互いの妹への愛を確かめ、熱い握手を交わした。

完二「あの、すんません。クマが全く動かないんですけどどうしたらいいですかね。」

完二の指の先には腹がいつぱいなのか露ほども動けていないクマが苦しんでいた。

直斗「集合に遅れそうなのでこれで。」

それに続いて天城、里中が集合場所へ向かう。

八幡「クマ、すまんお前は置いていくしかない。」

花村「お前のことは忘れない。」

鳴上「青春の思い出と共にここに置いていく。」

俺と比企谷、陽介、そしてりせはしっかりと合掌しその場をあとにした。

クマ「クマ、お金がないクマよー！助けてクマー！」

葉隠では悲痛なクマの叫びがこだましていた。

.....

やっと家に着いた…。

そう言えば土産を小町に渡さないとだな。

電話でもしてみるか。

小町「はいはい。久しぶりー、お兄ちゃん。なに？お土産ー？」

八幡「ああ、饅頭を買ったんだか、いつ渡しに行けばいいか？」

小町「お饅頭かー。いいチョイスだね。近いし明日来たらいいんじゃない？」

八幡「え、俺疲れてるんだけど。でもまあしょうがないか。じゃあまた明日。」

小町「はい。待ってるね、お兄ちゃん！お土産話もよろしくー！」

八幡「はいはい、わかったよ。」

明日はゴロゴロしたかったが、それも行かないらしい。

八十稻羽が千葉から近くて良かった。

ならマツカンおいとけよ。

だが、ネオフェザーマンというヒーロー物の番組があつたことは素晴らしい。

あれはプリキュアには及ばんがなかなかのものだ。

しかし疲れたな。

とりあえず今日はもう寝るか…。

第七話 9月11日

約二週間ぶりに帰つて来たぜ千葉！

意外と経つてないな。

見慣れた景色を見ながら自宅を目指して歩いていく。

八幡「こ、これは……」

途中あつた自販機を見ると千葉のソウルドリンクことマックスコーヒーが売られていた。

八十稲羽にはなかつたあの舌に残る練乳由来の甘さがどうも恋しくなり思わず買つてしまった。

人生が嫌と言うほど苦いものだからコーヒーぐらいは甘くてもいいのではないかと思う。

そんなことを考えながらマツカンを楽しんでいるうちにこれまた二週間ぶりの我が家へたどり着いた。

八幡「たでーま。」

小町「おかえりー！おにーちゃん。お土産は？」

八幡「ほい、饅頭。」

小町「ありがとー。じゃあ早く入って入ってー。」

このしつくりくる感じ…やつと帰ってきたことを実感した。

だがりビングへと行くとそこには、

由比ヶ浜「やつはろー。ヒッキー。」

雪ノ下「お邪魔しているわ。比企谷君。」

奉仕部の二人が待っていた。

八幡「…なんでお前らいの。」

雪ノ下「小町さんから連絡をもらったのよ。」

由比ヶ浜「それよりヒッキー、あたしたちに連絡も何もしないでやそ…なんとかに行

くなんてひどくない!？」

八幡「八十稲羽な。俺も急だったんだよ。平塚先生からいきなり連絡あつて『八十稲羽で環境を変えて自分探してもしてきたまえ。手続きはもうしてあるからな。もちろん両親にも了解は得ているからな。』と言われたら行くしかないだろ。」

雪ノ下「これはまた急ね。いくら平塚先生と言えどもあまりに強引だわ。」

由比ヶ浜「そんなことがあつたんだー。じゃなくて!なんであたしたちには言ってくれなかったの?」

アホの子なのに気づいたか。

八幡「別に俺が転校紛いのことでもお前らの学校生活には支障はないだろ。」

雪ノ下「そうね。でも奉仕部に所属している以上部長である私には一言言うべきではないのかしら。そんなこともわからないの？ヒキガエル君。」

八幡「ナチュラルにトラウマをえぐるな。そもそもお前の連絡先知らんからお前には出来ないだろ。」

由比ヶ浜「じゃああたしに連絡してくれば良かったじゃん。」

八幡「いや、お前ちゃんと覚えてられるかわかんなかったし。」

由比ヶ浜「信用無さ過ぎだ!?!」

八幡「あと、お前らにも土産な。」

雪ノ下には辰巳ポートアイランドとかけたヘビのコスプレをしたパンさんのキーホルダー。

由比ヶ浜にはわからなかったのでサブレッっぽい犬のキーホルダーを買ってきた。

雪ノ下「わ、悪くない選択ね。大切にするわ。」

由比ヶ浜「ヒッキーありがとー。すごいうれしーよー!」

小町「お兄ちゃんが成長してる…!小町嬉しいよ。」

八幡「俺だってこれくらいはするわ。」

それから八十稲羽のことや修学旅行のこと、逆に総武高のことについて俺たちは話した。

二週間とは意外と時間が経っていないようで経っているんだなとつくづく感じた。そうこうしている間に時間が過ぎ午後5時を過ぎていた。

八幡「悪い、俺もう帰らないとだわ。」

由比ヶ浜「もうそんな時間!?!じゃあねヒツキー。」

雪ノ下「またね。比企谷君。」

小町「じゃあねお兄ちゃん。小町は離れていてもお兄ちゃんが大好きだからね。あ、今の小町的にポイント高い!」

八幡「はいはい。それじゃーな。」

挨拶を交わし我が家を後にし、八十稲羽への家路を急ぐ。

電車に乗ろうと駅前に着くと、

アナウンサー「すいません。少々お話よろしいでしょうか?」

八幡「はあ。」

アナウンサーらしき人に声をかけられた。

インタビュ어가したいらしく、時計を確認するとまだ余裕があったので応じることにした。

アナウンサー「最近収束が見られた八十稲羽の連続殺人事件についてどう思われますか？」

八十稲羽「今住んでる所じゃねえか！」

事件がどうのこうのと白鐘が言っていたが結構ヤバイやつだったのかよ！

平塚先生「一体なにしてくれてんすか…。」

八幡「そうですね。実際に住んでいる所なので事件が収束したのは嬉しいですね。」

アナウンサー「ありがとうございます。」

無事にインタビューも終わり、電車に乗り八十稲羽に戻ってきた。

時間は午後8時を回っており辺りは既に暗かった。

あんなこと聞いた後だとなんかやだなここ。

携帯で調べてみたら今は三人の被害者が出ているらしい。

ただ妙なのが一人目二人目は殺害方法がわかっていないのに対して三人目ははっきりしているという点だ。

もしかしたら犯人はもう一人いるのかもしれない。

まああくまで予測なんだけどな。

考えている間に自宅についた。

貴重な日曜日を無駄にしてみました…。

とりあえず今日は早くやることやって寝るか。
そうしてその日の夜は更けていった。

第八話 9月12、13、14

9月12日。

俺はいつものように菜々子とテレビを見ながら家族団欒の時間を過ごしていた。

菜々子「あのお土産ね。クラスの友達に見せたらすごいねーって言ってたよー。」

鳴上「そうか。それなら良かった。」

何でもない話をしていると、

アナウンサー「今日のゲストは探偵王子こと白鐘直斗君です。よろしくお願いまーす。」

直斗「よろしくお願います。」

テレビ番組に直斗が出演していた。

話を聞いていると直斗は八十稲羽での連続殺人事件に対して違和感を覚えているようで、さらに調査を続けていきたいとのことだった。

俺達も違和感はあった。

直斗も言っていたが、前の二件と三件目とでは類似はしているものの三件目は殺害方法がわかっているからだ。

菜々子「お兄ちゃんの学校に探偵さんいるの？すごいねー。」

俺が考えている間に菜々子は直斗に興味を持ったようだ。

鳴上「そうだね。」

俺は笑顔でそう返す。

アナウンサー「…続きまして今回の事件の解決について町の声です。」

八幡「実際に住んでいる所なので事件が収束したのは嬉しいですね。」

……………！

比企谷がインタビュウを受けて答えていた。

菜々子「お兄ちゃんのお友達？」

俺は菜々子から見ても驚いているように見えたのか比企谷について聞かれた。

鳴上「ああ、二学期からきた転校生だよ。」

菜々子「へー、なんかスーパーのお魚みたいな目だねー。」

鳴上「っ！」

スーパーのお魚みたいな目。

つまり死んだ魚のような目ということだろう。

思わず吹き出してしまいそうになった。

菜々子「どうしたの？」

鳴上「だ、大丈夫だ。そつとしておいてくれ。」
和やかな時間が過ぎていった。

.....

翌日。

いつもの通学路を歩いていると前に比企谷が見えた。

少し話してみようか。

鳴上「比企谷、おはよう。」

八幡「おう。」

鳴上「比企谷、昨日テレビうつつってたな。」

八幡「みたのかよ……」

鳴上「ああ、ぼっちりな。」

八幡「まあ、いいけどよ。」

花村「おーす！相棒！比企谷も一緒か。おす！」

陽介の声を見ると、向こうから天城や里中といったいつものメンバーがやってきた。

鳴上「押忍。」

八幡「おう。つて鳴上。押忍っていつの時代の挨拶だよ。実は体育会系なの？」

天城「そういえば鳴上君って部活何してるの？」

千枝「確かバスケしてたよね。」

鳴上「あと吹奏楽部にも所属している。」

天城「へー、兼部なんてすごいね。」

鳴上「体育会系でありながら文化系でもある。ハイカラだろ？」

花村「流石相棒！」

八幡「いや、ハイカラとか訳わかんないから。」

比企谷がいいツツコミをしてくれる。

陽介とはまた違ったツツコミだ…。

直斗「みなさんおはようございます。」

制服とは違った服装の直斗が前に立っていた。

直斗は静かに話し始め、俺達は彼自身の事件への見解を聞いた。

俺達を犯人として疑ったこと。

報道された人物が殺されている、もしくは失踪していること。

俺達が事件を通して知り合ったのではないかと思っていること。

確証を得るための行動が必要なこと。

直斗「これが僕の事件への見解です。」

鳴上「いい推理だな。」

直斗「余裕ですね。まあいいですが。僕は僕のやり方で犯人を追います。」

八幡「それ、危ないんじゃないか。お前が無理する必要はないだろ。」

比企谷はそう淡々と言った。

いつになく真剣な比企谷に俺達は驚きを隠せない。

直斗「探偵なので。でも、探偵としての僕しか求められてないのは悲しいですね。失礼します。」

直斗はそう言い残してその場を去った。

.....

昨日の朝、白鐘のやつ明らかに無理してたな。

なぜか朝の出来事から白鐘のことが頭から離れず過ごし深夜12時前になっていた。

探偵としか求められない。

それが悲しい。

つまり探偵としての能力しか必要とされていけない

それは白鐘直斗がついこぼしてしまった本音だろう。

誰もが抱えてしまうコンプレックスのようなものでそれを抱えきることが出来なかったのかもしれない。

そんなことを考えながら部屋にあるテレビの画面を見つめる。
カチツ。

壁に掛けてある時計が深夜12時を告げる。

するとぼうつとテレビ画面が光り、荒い映像が流れ始めた。

そこには帽子を被った少年らしき影と猫背の高校生くらいだろうか？ 男の影が映っていた。

八幡「ん？」

猫背の方はまるで俺だ。

そして少年の方は白鐘…か？

映像はすぐに終わってしまった。

噂では聞いたことがあったがこれがマヨナカテレビ。

実に興味深い現象だ。

俺がどつかの物理学者なら黒板にめっちゃ数式書き込むレベル。

まあ文系なんだけどね。

数学なんてとつくの昔にサヨナラさ。

とりあえずマヨナカテレビが何を暗示しているのかはわからないが何か嫌な予感がする。

報道された人物。

俺と白鐘。

つまり、次の被害に遭うのは、俺達なのか？

ならやらなくてはならないことがある。

あいつらから距離をおかなければ…。

第九話 9月15日

休み時間、教室。

俺はいつものメンバーと昨日のマヨナカテレビについて話していた。

千枝「昨日のマヨナカテレビって誰かな？」

天城「わかんないよね。」

誰も映った二人に心当たりはないようだった。

りせ「完二はどう？」

完二「あ！いや、わかんねえよ。」

花村「なにボーツとしてんだよ。」

完二「いや直斗のやつが昨日変なこと言ってたんで。」

完二は直斗の昨日の発言を受け考えていたようだ。

それを受けて周りが完二をからかう。

それが嫌だったのか完二は帰ってしまった。

すると前の方にいた比企谷が席を立ち教室を出ようとする。

花村「ちよっと待てよ、比企谷。一緒に帰ろうぜ。」

八幡「…なんで？」

花村「なんでって…。いつも帰ってただろ。」

りせ「そうですねよ比企谷先輩！一緒にかえりましょ！」

八幡「っはー…。」

比企谷は深いため息を不愉快そうに吐く。

花村「な、なんだよ。」

八幡「いや、正直鬱陶しいと思つてな。」

千枝「え？」

八幡「え？じゃなくて。いつもいつもかまつてきて、邪魔くさかつたんだよ。俺は

ぼっちだ。一人なんだよ。」

天城「比企谷君、いつも我慢してたつてこと？」

八幡「ああそうだよ。花村のノリも里中の騒がしさも天城の大爆笑も完二のホモ臭さ

も久慈川のキャピキャピした感じももちろん鳴上も…。」

花村「テメー、何言つてやがんだ！」

比企谷が言い終わる前に陽介が立ち上がり胸ぐらをつかみ叫ぶ。

花村「お前はそう言うこと言わない奴だと思つてたよ…！」

八幡「それはお前の、いやお前らの偏見だ。俺はそもそもこういう奴なんだよ。」

花村「それでも言っていないことと悪いことがあんだらうが！」

八幡「じゃあ聞くがお前らも一度もお互いが邪魔だと思つたことはないんだな。」

花村「それは…。」

花村は目をそらし手を離す。

八幡「大して長く付き合つてもないのに俺がお前らに邪魔だと思わないわけないだらう。」

呆れたように比企谷は言つた。

鳴上「今の話は、お前の、比企谷八幡の本心か。」

少し間があつて、

八幡「ああ。本心だ。」

そう比企谷は言い放ち、教室を後にした。

花村「なんなんだよ！」

千枝「あの言い方はないよねー。」

りせ「感じわるーい。」

周りの仲間達は比企谷の態度に不満があるようだ。

正直俺も不愉快ではある。

しかし、

鳴上「何か引つかかるな。」

昨日のマヨナカテレビの猫背の男、まるで比企谷のようだった。

もしかしてあいつはそれに気づいて…。

天城「鳴上君? どうしたの?」

鳴上「いや、なんでもない。とりあえず比企谷のことは気にしないで、そつとしておこう。」

花村「相棒がそう言うならいいけどよー。」

千枝「とりあえず帰ろうよー。」

鳴上「それで今日も雨だしマヨナカテレビをチェックだな。」

天城「うん。」

そのまま下校し、夜の12時を迎えた。

マヨナカテレビは映るだろうか。

ボウッ

映った!

非常に鮮明な映像だ!!

直斗「こんばんは。白鐘直斗です。これからは世紀の大実験を…」

白鐘がマヨナカテレビに映ってしまった。

つまり既に白鐘は既にテレビの中ということだ。

直斗「…ではまたお会いしましょう。」

これで終わりか。

早く助けなければ…。

ボウツ

八幡「うーす。比企谷八幡でーす。これからぼっちのぼっちによるぼっちのための「ぼっちテレビ」を行います。モテない男子女子諸君！刮目せよ！」

また映った！

そして比企谷！

ぼっちテレビってまんまだな。

ピピピピピピピピ

鳴上「俺だ。」

花村「おう相棒。二人同時ってどういうことだよ!?こんなん聞いてねーぞ！」

鳴上「ぼっちテレビ、面白そうだな。ラジオがあれば間違いなく聞く。」

花村「ぼっちラジオ！ってか。そんなこと言ってる場合か！」

鳴上「とりあえず明日はジュネスに集合だな。」

花村「お、おう！また明日な！相棒！」

二人同時か…。
これはどうしようか…。